

人生一趣味。釣りの醍醐味は水の中だけじゃない

ヘラブナ釣りの魅力にはまり、釣りに必要なタモや玉タモ、置きなどの和道具を、天然の竹やカヤの木を使って、自作している野木さん。今では「道具作りの勉強のために」と、親しい人や釣り仲間のために腕を振るっています。

【ヘラブナ釣りの魅力】

向谷で生まれ育った野木さん。幼い頃から大井川でよく遊び、小学生になるとアユ釣りを始めるようになり、友達の中でも一番上手に釣っていました。中学生になった野木さんは「ヘラブナ釣り」に惹かれ、野守の池に通いつめたそうです。「子どもながらも、ヘラブナ釣りの大人たちがとても紳士だと感じました。それと、ヘラブナとの



玉置き

駆け引きがすごく楽しかったんです」と笑顔で当時を振り返ります。その

後、地域のヘラブナ釣りに入り、大人たちに混じって釣りを楽しむようになりまして。「あのとき、ヘラブナ釣りを教えてくれた人たちに、とても感謝しています」

が欲しくなりましたが、とても高価で『それなら自分で作ってみよう』と思い立ったのがきっかけです。そう言いながら、野木さんは作った玉置きを見せてくれました。独



ヘラブナ釣り具づくり名人の野木鋭也さん (稲荷二丁目)

【和道具を作り出すきっかけ】
「ヘラブナ釣りを始めた頃は、金属製の道具が主流だったんですが、次第に釣り人の間で、天然材志向が高まってきました。私も天然材の道具

特なカーブを描く枠や和を意識したデザインは、とてもユニークで、木が持っている柔らかさと力強さを表現しています。「市販の物みたく丸く作ることもできるけど、木の

温かみを出すようにしています。プロは材料や作り方に制限が入るけど、私が作る場合は、いくらでもやりたいだけ手を尽くせるから、思いどおりに作れます」と和道具作りの面白さを語ります。

【趣味で自分を磨く】

野木さんは、15年ほど前から、芦ノ湖のヘラブナに魅了されて、箱根に通っています。「今は、箱根のヘラブナ一本です。このあたりに比べて魚の大きさや力が全く違って、とても魅力的です。タモも、15倍近い大きさのものが必要になったんです」と話す顔も、技術力アップに向けての嬉しい悲鳴といった様子です。「作った道具はほとんど使ってほしいです。使ってもらえますから」みんなのために作ることも、自分磨きの一つと言います。

「正直、サラリーマンのうちには、釣りに費やす時間が足りないです。だから、今から定年後が楽しみで仕方ないですよ」と、目を輝かせて話してくれました。



和道具を作る様子

Shimadian File #29

